

特38

373

湯谷基守著

靈談記實

全壹冊

014705-000-9

特38-373

靈談記實

湯谷 基守/著

M28

ABB-1147



空蟬の世にありとあらゆる萬物と。皆ことごとく。

その本にかへらざるは土より生じ草

木の土に復り。水より成し氷雪の水よかへり。山谷

より流れ出し。水の海に出ては。地脈を傳ひて。再山

に。かへり。類鳥獸の。願會より下る血の足の踵に

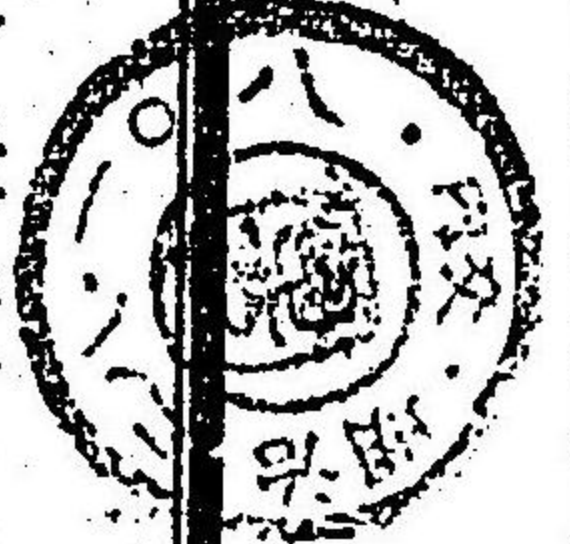
至りて。再願會にりへる。かどをもてる。知られた

り。其の天の。神の立給へる條理にして。誰しも。親く

眼前に見て。知らるべきを。動もそれバ。大かとの世

人の。その近き條理を。バ。尋むものともたれも。ひとら

ずて。遠く條理を離れたる。妄誕不經の外教。は。惑を



雲
談
記
實

されて。人の靈魂は神の賜物にしあるを。死て後。他所に至るべくおもふも。實に痴心の極みなり。けり。古より神祇にまれ。靈魂にまれ。奇しく妙なる事實の。國史も。家乘にも。往々載ては。何れと。其の皆。寓言の如くに思ひさして。方今文明開化の世。い。い。で。さ。る。こ。と。あ。ら。む。や。な。ど。い。ひ。詈。る。人。の。多。け。れ。ば。さ。る。人。々。を。曉。さ。む。あ。い。目。前。に。あ。り。し。事。實。を。示。さ。む。に。若。く。い。な。し。と。重。春。既。く。よ。り。近。世。神。異。紀。聞。と。い。ふ。書。を。次。々。に。記。せ。る。よ。か。む。然。る。よ。ま。れ。と。同。ト。國。人。に。し。て。同。心。あ。る。大。講。義。湯。谷。基。守。ぬ。し。

い。先。般。靈。魂。の。問。答。何。り。し。事。を。眼。前。に。聞。と。り。て。此。の。本。教。を。信。用。か。ぬ。人。と。も。を。論。ま。べ。き。捷。徑。か。り。と。て。其。靈。談。を。き。く。か。ま。ま。く。偽。ら。ず。飾。ら。ず。平。言。以。て。か。い。あ。る。さ。れ。さ。る。な。む。こ。の。書。な。り。け。る。此。度。お。の。れ。に。贈。り。ま。して。其。説。の。可。否。と。も。論。ひ。て。よ。書。目。を。も。命。せ。て。よ。序。文。と。も。記。し。て。よ。と。乞。ひ。る。任。に。閱。見。る。よ。實。も。靈。魂。歸。着。の。奇。し。く。靈。し。き。事。實。な。る。が。上。よ。か。の。湯。谷。孝。七。て。ふ。人。の。重。春。國。あ。り。し。時。よ。を。り。く。と。ひ。來。て。重。春。の。歌。の。点。削。を。も。乞。ひ。と。して。知。れ。る。人。あ。り。け。る。が。入。幽。て。後。も。本。教。の。一。助。

ともあるべき。さる靈異を顯せしむる事の。おむか
しくも喜をしくもおもひるれば。心の底ひ諾ひて。
書目を靈談記實と負せて。やがて其の由緒を。あ
一言をふるふあむ。

明治十六年十二月廿日あまり六日

丹生川上神社宮司正七位渡邊重春

靈談記實

大講義湯谷基守記

今茲明治十六年八月下旬初つ方より。手が母とき子五十四中
暑不例の批から。腸胃弱の病に罹りて。別室の二階に打臥た
りしが。同日廿七日の夜鶏鳴過の頃。下なる便所に行きて歸
りける時。長屋門の方より。何物とも知らぬ。大さ猿ばかり
とも覺し。物來りて後肩に凭れぬ。身体病疲れたれば。其重
さに堪えず。且は驚き怖れて。思はせ大地に倒れたりしが。辛う
して起り。二階の間に歸りて。傍に臥たる。父名ハ文三郎 六十四歳を呼起
して。惡寒甚しく。氣分も惡し。更に蒲團を加へてよと云ふ。故
に父は蒲團を出して着せつゝ。いゝ有ぞと問へば。今便所
に行きしに。玄かゝの事有てより。甚寒くなりて氣分惡し

と云ひも終ぬ内に。齒を喰ふばりて。震ひ出さなむら。瘡の状なり。さて母には。是まで亡靈の憑りて。瘡を煩はせし事度々なれば。父は此状を見て。此は又亡靈か。何ぞの所爲なるべし。今この病氣の上に。又しもさる。狂物の爲に惱まざる。は口惜き事に。ころ。何にもせよ。本体を見届け呉んど。帶引しめて。熟々様子を伺ひ居玉ひぬ。母は正体なく。煩悶する事良久し。さて其後は。静まりて。覺眠分たず。暫くは。咋く聲のみ聞えしが。暫有て。片手をあげて。自ら。己が臂部を打て。聲を勵まして云く。成ませぬ。此病人の穢い處より成ませぬと云ふかと思へは。頭をうか垂れて。へいへい

基守曰。此のへいへいの詞は。亡靈の母に對して云ふ詞にて。其詞を母の聞取りて。諸ひたる詞なるが。此問答を。傍よ

り聞たる時は。亡靈の詞は。少かも聞ゆる事なく。只母の云ふ言のみ聞えたれど。見易あらむ爲に。此書には。後に母に聞て。始めて問答のありし事を知たる詞をも。序に任せて。即時に傍聴し。る如くに記せるものなり。以下。靈云く。母云くと記せるも。皆然り。されど九月五日の夜と。十二日の夜には。母の亡靈に代りて云ひたる言あり。依て均しく亡靈の語あれども。其は現に。他の人々の親しく聞たる言なれば。其差別を立て。靈云母云の字頭を並べて記した。母の聞て後に話したる而已にして。列座の人の耳に入らざる言をば。一字引き下げて記したれば。見む人。この意を得てよ。

靈云。早うから此方の親方に頼たれと思ふたれども。餘り

元氣が強すぎて憑り付くこと能はねば。病中なれども。前親方は靈より我が父を指して云ふに達て御頼み申たいとあつて参りました。

詞にて生前に然ッ云ひ居たる言なり。

母云。ね頼みとあらば承りませしとう。

靈云。どうぞ此方の基守さんに頼んで。私が爲に御祓を爲て貰ふて下され。

母云。夫は承知しました。が貴方は佛葬であれば。結構をお浄土浄土に。ね参りなされた。で有ませうに。

靈云。浄土の何處やら。地獄が何方やら。更に道も。方角も分りませず。死ますると。只一筋の大道が有た故。其道を行きまし。されば。宮造り甚宏大にして。美麗を極めた御社御社も参りました。其内には。誠まことと樂たのしみげなる。音樂の聲こゑも聞えまし。

故。直に御門を入らうと爲たれど。中々這入ることが出来ず。て。歸かへりました。

母云。其様を結構な所にお出で有ながら。何してお歸なされたか。

靈云。左様でござる。其御門を入んとしたれば。其方は祓はらが足らぬから。罪穢つみけがれが未だ除かぬ故ゆゑ。今一度歸つて。靈魂の罪穢を祓はらひ清めて。再またひ來よ。其時には入れて遣らうと仰おぼせられて。御門を御入れ成れぬに因よつて。歸つて來ました。

母云。はあ。夫でお歸り成れましたか。夫は誰たれが仰せられましたか。

靈云。御門の内に數多の白装束を召れた方々がござつて。仰せられました。

母云。へー。そうして。今お歸り成れてからは。何處にお鎮りで
有ませ。

靈云。今は屋後の躰躰株の本に居ませ。誠に悲く情なさ。限
り知れぬとあれば。速に御被をして貰たう存じます。成ら
ば。今晚にも願たぬ。

母云。基守が居ませぬから。今晚は出来ませぬ。此夜。基守は在宅なりしが。忘
れたりしにや。如此云へり。

翌日の十二時迄には。お受合ひ申しませしよ。靈云。然らば翌日の十二時迄には。是非鎮りたいに因て。屹
とお頼み申ます。うして又。私が死るときに。後々の事ども
を。此方の親方に頼み置たぬと思ふたれど。何分その間な
くて死ましたれば。さうぞ。此後は地券の名面替ら。諸事
万事。宜しくお頼み申たい。

母云。お頼みの事は。一々承知しましたれば。早うお歸り成れ
ませ。元の處にお鎮り成れませ。

靈云。左様ならば。お暇申しませしよ。

母も左様ならば。と云つゝ。起上りて。両手をつき。亡靈の出行
くと見送る如き体なりしが。ばたと倒れて。いと疲たる容体
にて。昨てのみ居たりけり。暫く有て正氣付き。便所に行きた
いとて。獨り行て。事なく歸りつれば。父の母に對して。今は何
か夢でも見しやと問は。決して夢に非ず。正しく孝七さんの
亡靈來りしなり。此病中に來られては。大變と思ふて。始めは
來て下さるなと制したれど。頼みたいと云ふ故に。お頼みと
あらば。お取次申しませしよ。と云ふたれば。入り來りて。云々
の頼みなりきと。前記の通りの物語して。其夜は。其儘に明し

たり。翌廿八日朝。基守起出たれば。父。目ばやく見て。一寸來よ
 とて。二階なる母の臥床に連れ行きて。昨夜はいと不思議の
 事ありしとて。前記の次第をぞ語りける。予も大に驚きて。母
 に就て。また事の様を委しく問糺せば。昨夜初は後肩に來て
 取付たれども。後は肩に居るとも。前に居て云ふとも。また面
 貌儘にうれとは詳ならねど。音聲は正しく孝七さんに相違
 なかりき。初め其姿恍惚と見わたる故。此病床に寄り來られ
 ては叶はじと。手を振て制したれども。是非とも頼またいこ
 とがあるると云ふに因て。お頼まといはらばと云ひたれば。直に
 入來て云々の頼まありたり。依て今日は内に居て。（基守。毎日中津
 なる神宮教會

基守云。この孝七と云は。予が家の一族にして。田園數頃を

有ちて。聊か生計に支へなき身なれば。幼時より心掛け宜
 しく。師に就て。概畧和漢の書に涉り。歌を詠み。書を學び。僻
 田舎にては。物知り人と云はれたる程なりしが。享年五十
 六年八月月に入。本年四月十日の夜。家内の者だに。其臨
 終を知らぬ位の急劇症にて。何の遺言も無くして歸天た
 る者なり。跡には老母やす女。妻こら女。男子一人（名を壽市。呼ぶ）。女子
 三人。残り。世々同村なる（豊前國下毛郡湯谷村）。禪宗曹洞派瑞泉寺の壇
 家なれば。禪式もて埋葬して。諡を通山慧達居士と号けた
 り。斯て二週日の後。老母やす女（享年七十餘）も病死しければ。同く
 寺に頼みて送りしなり。借父の語り給ひけるは。此方の親
 方に頼まんと思し。餘り元氣強くて。寄り付くと能は
 ざりしと。亡靈の云ひし事に。思ひ合すべき事あり。其は。同

月廿六日の開夜。提灯を携へて。(靈の來りし) 近隣なる勘次郎の家に幼兒の死たるを。吊問のため行んとして。長屋門を出たるに。前家(亡靈孝七)の裏の土屏をまに見ゆる躑躅の梢に。ぼんやりと。明りの映けれを。何物の明りなるらん。提灯の光の映しにやと。提灯を後手に持直て。二足三足逡巡りて。容子を伺ひたれども。尙明りの有ければ。何となく後へ少し引返たれども。又思ひ直して出行きたれば。其時は疾く明りは無く成たり。通り過して吊詞竟て。歸りける時も。前の明りと見えざれば。何とも心に掛けを居たりし。今亡靈の詞に。鄭躑株の本に居て。早くとり此方の親方に。頼みふんど。思ひ居りし。彼の詞に。思ひ合せて考ふれば。兼て亡靈は。彼の處にイみ居て。時を待ける折しも。我が通りけ

る故に。即て頼まんと思ひ立し。其氣ざしの現れて。明く見えたるもや有りつらん。其時。その明りにも心附き。何心なく通りたらんには。直に靈は憑りつらんを。早くも其明りに心付て。氣を取直したる故に。憑り難かりしならん。其所とさして。此方の親方に頼まんと思ひしかど。餘り元氣強くて云々とは。云ひたるにこそ有ら先と。語り玉へり。是は想像の説なれども。前後の事實に思ひ併すれば。証たるには非ざるべし。

諸右の頼み有つれば。まづ瑞泉寺内なる孝七主の墓所。また亡靈のイみ居ると云へりし。躑躅株の處にも至りて。生たる人に云ふ如くに。昨夜我が母にお頼みの事は承知せり。本日勤め行ふべし。地券名面替の事。並に後の事なども。少か心に

掛玉ふこと勿れなど申述て。借未亡人のこう女に逢て。悉く事由を談ければ。涙を含て。頓死の如き臨終取れば。定めてさる事も有つらん。悲く畏きことにこそ。孝七殿の頼みの通り。宜きに計ひ玉ひてよと有ければ。家に歸りて。式の如く。修祓の神具を調へ。心計りの神饌とも造り供へて。神前に向ひ。先づ。天照皇大御神。また幽冥大神。祓戸大神。産土大神。たち。今茲明治十六年四月十日をしも。顯世の限りとして。幽世に参入り隠るひ侍る湯谷孝七が。此の現世にして。過犯したる許多の罪穢をば。今日の修祓の神事の御験によりて。祓給ひ清給ひて。幽世の神の冥府に收玉ひ。治玉はむ事を請申し。次に靈牌を御前に置て。法のまに。操返つゝ。懇に修祓の事仕奉ぬ。時は正午十二時なり。斯て靈牌をさす女に返しける

とき。こう女云へるは。斯くお祓を好ひからは。佛葬を忌嫌ひての事なるべきかど。斯る事には。能く人の疑を容るゝものなれば。予も心して。強ちさる事にも非ざるべし。併し。今日のお祓。神靈に通じたらんは。又一度は來て。禮を云ふ事のあらんも難計。其様子に因てと云へば。然らばとて。こう女は歸りけり。

借同日午後六時。母は例の二階なる病床に打臥たるに。弟峯司の妻あさ。一人付添て介抱し。家内の者は。本宅の様先に出で。納涼して居たりしが。母の容体俄に變りて。震ひ出したるよし。あさの報知有ければ。父はそれと心付て。少しも騒ぐ氣色もあく。二階より上り見れば。母ははや前後不覺に苦惱の体。昨夜の通りなりければ。急ぎあさを退けて。蚊帳の外に端

座して心を鎮て云ひけるは。昨夜頼みの地券のことは承知せり。頼みあくと。本月中には。壽市に(孝七の長男)名面替致んと思ひしかど。何分にも御用多く。(戸長を勤め居る故)寸暇なくして延たり。來月にも相成らは。必ず其事果し申さん。跡の家の諸事万事。これ亦御心を配り玉はずとも。速そとに行いくべき處ところに行き玉ひて。安やすく穩まびに鎮り玉へと。操返くわ一いつ度たび獨言ひとりごと去て。神宮教會に定さだむる所ところの畧りやく祓詞はらひことばを唱へける内うちよ。亡な靈たまと。母との問答もんたう始はじまりたり。此時基守は。よく人の病を癒れたる時には。狐狸。または名なき惡靈などの來りて。災異をなす事もあるものなれば。若さる事ならんには。神法して。壓伏せんものを。少く其用意して行きたる故に。少しく父に後れたり。さて手が行きたる時は。已に問答始まりたり。

靈云。今日のね祓は。今晚の十二時迄と思しよ。案外早く爲て下されに依て。その分ぶん鎮る處ところに早く鎮しづまれる様に成なりました。是でころ。永々の苦惱も除はらかるで有ありました。誠まことに

難有たがう存ぞんじます。

母云。貴方が。あの様ような。むさくろい所ところにござるがいと惜あはさ。早はやう結構けいこうな所ところにね出いる様ようにと思おもふて。今日けふね祓はらをさせて上あままたる。貴方に届ときましたら。

靈云。届ときましたし。とも。御丁ごてい寧ねいに。長ながくして下くだされて。祓はらひ給たまへ。清きよめ玉たまへのね詞ことばが。一いち々じつ耳みみに入いりました。難有たがう存ぞんじました。此この後のちは。どうぞ神葬しんさうに祭まつりかへて。年忌ねんき吊とひには。今日けふの通とほりのね祓はらひの復習ふくしゅうをして貰もらひたい。

母云。それは何と仰おほせられます。神葬しんさうにして。此この後のちの追善つぜん供養くやうには。今日けふのね祓はらひの復習ふくしゅうをして呉くれいなとな。

靈云。左様さやうでござる。是これまでたび。經きやうも讀よんでくれ。殊ことに。盆ぼんには。近所きんじよの僧侶そうりよと集あめて。施飯せはん鬼き供養くやうを爲して呉くれなれど。

私わがの爲ためには。何なんの益えきも立たませぬ。

母云。それは困こまたとて有あります。寺てらのゐるに。うんな事ことをしては不ふ都合ごうで有ありましよう。此時基守心付て。父に向ひ。此事は。後室。こゝ女に聞せる方宜しからん。私爰に在りて。問答の始末をば確と聞留むへければ。こゝ女を呼

び下されや云へは。父は詰して二階を下りたり。是より基守一人して聞たるなり。

母云。貴方あなたがお死し成なれた後のちに。老母おはは様さまもれ死し成なれたが。貴方あなたはれ逢あ成なりましたか。と云へい。

靈たまは大おほに驚おどろて。母様ははさまがれ死し成なされたとな。夫おとこは一向いっ知ちりませぬが。夫おとこは眞實まことでござるか。嗚な々な御難儀ごなんぎを成なされたで有あらう。

と云ひて。如何なる事によ。此詞は。母。亡靈に代て云ひたる。即ち靈の言。両眼に。涙を浮べ泣なき悲かなみけり。良よ好こつて。

曰いはく。以下は基守俯聴したるにあら。お後に母より聞たる言なり。跡あとは定まめて淋しみしからん。何なんして暮くし居ゐるやらん。子こ供どもらはいかならん。

母云。跡あとはどややらからやら。矢張やり煙けいの立たて居ゐります。子こ供どもも皆みな達たつ者ものにして居ゐませれば。其邊そのへんをば御心ごこころに掛かけ玉たまふな。そんなら老母おはは様さまにはれ逢あ成なれぬとな。

靈云。どうした事ことやら。未だれ目めに掛かりませぬ。母云。夫おとこはまゐりどうした事ことで有ありましような。

靈云。夫おとこはまた逢あ成なれる事こともあらうと思おもひませぬが。貴方あなたのこの病氣びやうきの所ところに來きて。苦惱くなうを増ませた上に。難有がたいなれ。祓はらいを受うけて。何なんんともお禮らいの申まし様さまがない。どふぞ此後このちにも。今日けふのお祓はらいの復習ふくしゅうをして貰もらひたい。

母云。そのお禮らいには及およばせぬと。寺てらのあるに。此後このちの處ところもれ祓はらいをしてとは。不ふ都合ごうで有あります。併ひし道々みちの有ありまれば。何なんと致いたたら宜よろしう有ありましよう。此時父は。こゝ女を伴ひて二階に上り來れり。依て此後三人にて聞たるなり。

靈云。仰の通り。道々で行ねば成ませぬ。因て。寺に對して。夫れ程不都合ならば。皆の處は祖先代を云ふ言ならん。鬼も角も。私一人丈は。是非とも。さうして。貰ねば成ませぬ。曖昧な事では。私の爲に成ませぬ。

母云。お寺に對しては不都合なれど。經を上げても役に立ぬと仰らるれば。仕様が有りませぬ。貴方一人丈けでもと仰らるれば。分りました。さうせせは成りませぬ。

靈云。夫は必もお頼み申ませ。地券の事も。來月中には。屹と名面替をもし。跡の事も世話して下さると。今と沙汰が有ましたに依て。安心しました。此は。問答の未だ始まらざる前に。父が靈に對して。獨り心に誓言せしを。聞取ての言と覺たり。

れ被も相濟たれを。是で。お鎮る所に。屹と鎮られると。思ひまひれを。只今出立致しませぬ。もう此後とては。れ禮に

は參りませぬ。又命もあらば。基守云。死靈として。命しあらは。この詞。甚だ訝し。するに。そのあらめ。されど。現世の人にては。測り知られぬ。幽理の存

母云。決して其れ禮には及びませぬ。早うれ歸り成させ。左様ならば。と云ひつゝ。起上り。手をつかへて。窓の方に向ひて。見送る体して。打臥たり。さて後は言語正体なき事良久しうして。水と乞ければ。予立て。枕邊に至り。水と欲しと。なと問は。清らある水をと云ふ。故に。自ら井水を茶碗に汲取り。清水なうと。差出せば。起上りて。何も云ひせ。左手に之を執り。右手の指先に。て。水を左右と振り。ぎて。口に。被玉へ。清玉へと三遍唱て。残れる水を飲干て。柏手打て。伏拜たるま。又打臥て。正体なき状なりしが。暫くして。基守はと云ふ。故に。予立ちて。枕邊に至り。基守爰にあり。御氣分はいか。苦しき事やお

はまる。怪き夢や結び給ひしと問ば。夢も夢う。今が夢の真最中と云ふ。また云く。今來て。厚う禮を云ふて歸つたな。今日はやうお祓をして呉たに依て。早く鎮る處に鎮られると云て。重々の禮を云て往たな。と云ひはされども。詞のはしく。常の詞には似せして。一口々々息切て。甚く勞たる狀あれ。深くは究め問ずして。其夜はそれにて事止たり。翌廿九日の朝。前夜の事ども。悉く母に聞て。問答の始末。前記の通りなるを知りたるなり。さて前夜亡靈の姿は見えたりやと問は。母の云るや。前夜は姿あり。くせ見えて。蚊帳の内に入來て座りたれば。直に氣分悪くなりて。前後覺せなりしと云。其姿は如何にやと問へは。四五歳の童子位の大さにて。顔色。容貌。音聲。少しも生たる時に違はせ。頭はさんきりに

て有き。初先入りしと歸るまで。常に頭垂れてのみ物云て。一度も顔を上げたるとは無りしと云ふ。其衣服はいかに有しと問は。衣服は常の衣服にて。色目は分明に分らざりし。惣ての姿甚汚穢かりしと云へり。さて斯る事ども聞竟て。基守は神宮教會所へ出勤せんとしける處に。こゝ女來れり。依て前夜の事ども物語て。貴女も夜前お聞の通りのとなれば。一家擧つて改葬は出來まいけれど。孝七殿一人だけは是非とも神葬祭に改めせはなるまいと云へは。左様でござる。彼の通りの頼みであれば。どう宜しうお頼み申ませ。私は不案内のとなれば。靈舎のとも。お祭りのとも。一切お頼み申ませ。故。然るべくれ。差圖を下されよと云ふ。故に承知して教會へ出勤せり。

さて此時子が母子が妻。またこう女など。其外にも人々居
並びて。夜前亡霊の老母様の死たるを知らぬ。またれ目に
も掛らぬとは。いかの事ならんと云へ。夫は老母様は
ゆれ程の念佛の行者でゆれば。極樂浄土に往生したるに
疑ひなし。孝七さんも。彼土に往生したならば。祖母様に逢
れる事あれと。左に非せして。神様の處に行きたる故に。行
き所違へり。夫れ故に逢れぬに有んと云ひ。また。裏の躰
躰株の本に居りながら。其家内なる老母様の死去のとや。
其葬式佛事なども。次々に有つるふ。夫を知らぬとは不審
など。甲乙種々云ひ騒げるを。基守さへて其疑ひさる事な
れど。能く物の道理を考へて見られよ。同じ天地の間に。同
じ神賦の靈魂を戴き。同じ人間と生れたる者が。死れば

とて。豈俄に異土に生れて。異様の物とならんや。既に孝七
殿の。れ浄土が何處やら。地獄が何方やら。更に道も方角も
分らぬ。只一筋の大道のあつて。其道をたどり行きたれば。
結構な御社に参たと云ひしをも者へ合はべし。凡て天地
を始め。万物もな神明の生成し玉ふ所にして。人は其万物
の靈長なれば。體魂ともに。神明の賜物なり。されば人死す
るや。直ちに體は元素に歸り。魂は神の御許に歸る。これ惟
神の教旨あり。佛に歸し。耶穌に頼み。其法式以て葬りもし。
祭りも爲たりとて。其は人爲の私事にして。決して神賦の
靈魂が。それ爲に。左右せられて。他所へ行くものには非
ぞ。必も神の御許に歸る者あり。されば。老母さんの靈魂も。
此世にては。念佛を業とし玉ひしかと。決して佛に取れて。

淨土とやらんに至るものには非ず。必し神の御許に参り居るに相違なし。人の生るゝも死るも。万の事皆専ら其事を分掌り玉ふ神は坐ませども。其地々々の産土神が。其中に立玉ひて。何事も。其執成し。依ることにて。人の死たる時も。其靈魂は。直ちに産土神の御許に参り。産土神は之を受治め玉ひて。幽冥の大神の御裁可を得たる上にて。天に上り。空に通ひて。造化の神業。預り玉ふも。あり。諸國の神社に仕ふるも。あり。外國に渡るも。あり。山海。他の幽郷に留まり住めるも。あり。て。千差万別計り難し。と云へども。未遂に天に歸らしめて。永く久しく。本津御祖神の御許に仕へ奉らしめ玉ふの御掟なるとし。是皆この世にての。所業の善惡。功勳の多少に依て。段等定まるものなりと云ふ。

れば。老母さんの神靈も。産土神の御許に参りたるに相違なし。外教者の説く所にては。深く頼みて。一念御助け候へと申さん衆生を。我助けば。正覺を取らじ。と誓ひ玉ひしとは。聞けども。深く頼み申さぬ衆生は。無宿縁の者なれば。彌陀の力にも。及ばず。と棄玉ふと云ふ。また耶和華。爾之上帝は。嫉妬の神なり。悪我者禍之。自父及子。至三四世。愛我而守我。誠者。福之。至千百世。など云ふ。由なれど。吾神道にては。或俚語にも。頼め助くるは。他人の慈悲よ。親は頼むも。頼まぬも。どある如く。一視同仁。恰も日光の照臨する所。醜美淨穢を選はざるが如きものなり。其は神は人の親なり。人は神の子なり。子よく正直にして。子たる道を守らば。何ぞ殊更に。その親に向ひて。慈悲を垂玉への。依頼無

しとて。両親之を捨て願とざることあらんや。神と人との間は。父子の情愛を以て推量らば。必ず大差なきを信ず。天造教と。人造教との差。こゝに有り。されば老母様は。真宗の家に生れて。真宗僧の教訓より外に。聞たる言も。見たる書も無れば。彌陀一佛より外尊きものなしと。一途に思ひ込みたる故に。念佛寺詣りを業として。神明に頼むの心は無りしかど。正直一方にして。毫末も惡意ある人にあらず。其上高齡して。臨終もいと安心して死たれば。事もなく其儘に。産土神の御許に参りたるものと覺えたり。夫に引替へ孝七殿は。臨終も彼の如くなりしかば。安心して死たるにはあらじ。又人こそ知らね。男子の事として。學問上なり。事業上なり。種々の幽罪や有つるらん。されば一旦は。直に神の御門には参

りしかど。靈魂の罪穢を祓ひ清めて來よとて。遂歸されたるなれ。此時若し神の御門を入りたらんには。老母様にも逢れつらんを。未だ神の御門をだに入る事叶はざる身の。いかでか御門内なる人を見ることが得んや。また現在わが家の後に。イみ居なむら。老母様の死去を知らざりしは。如何なる事にあ。詳かには云難けれど。試に云は。亡靈既に神の御門を入たる上は。善にもあれ。惡にもあれ。神の御支配を受ける身と成て。幽世の名稱に列りて。住處品位も定まるべけれど。孝七殿の神靈は。未だ其御門をだに入る事は。能はずして。現世に謂ゆる無籍者の身あれば。寸時も安居すると能はず。晝夜とも。一途に吾身の落着をのみ思惟ひて。自他の事には。少か心を留めざりしと見えたり。現世にては。別に心を留

重春云、宮崎大門云、顯問答云、凡て魂靈とありて幽に入るとは、魂の預らぬとにて見るも穢はしき程の上なり、其上等幽霊、顯事は知らぬ等、然れども、生たりし時より心と残し、魂と込たりしと、魂と成ても能く知り、故に知る人並

の處に通行致がたし、依て凡て魂靈皆、の成行の様に、は知らぬなり、が、魂なり、云々、また、門が、また、極樂は無に、と云ふ意をし、明し、な、ら、三部經を、上、何れと、は、何れと、云ひしぞや、と問し、答、に、其、經は、我父の爲め、に、上、け、せ、し、なり、云、は、彼、父、の、心、追、善、なり、

めむとも。直にその處にての事は。何もよく見もし。聞も知らる事な。其は。老母様の死去。れども。幽界の事は。現世の理のみ以ては。云ひ定め難きこと多し。葬祭等は。知らざりし由なれども。已が爲にとて爲たる佛事をば。能く知り。又父が前夜。屋後の土屏の外を通りたるをも。早く之を知りて。憑り頼まんと思ひ立しにても知らるゝなり。と云ひ諭し。かど。まゝと心得覺りたる様にも非ざりしが。九月十二日の夜の神霊の言に依て。始めて予が説の誣ひざるを覺りたる趣なり。翌三十日の朝。こゝろ女來りて曰く。此の間からの事。いつとなく近所隣りの人も聞及びて。斯様のことは。狐狸の所爲なる事甚多し。うゝと心得て後悔する人世に多ければ。能く考ふべしと云へり。此節の事は。全く左までは思はねども。よく孝七殿の亡霊と云ふ証據もなきに。後に人に笑れる

様のと有てはならぬ故に。昨日頼み申た靈祭の事は。暫く見合せて下されしと云ふ。故に予も聊か心に激して。然らば御勝手に成るべし。併し此節のこと。基守は於ては。決してさる狂々しき事には。非せと信せり。今のね咄のことは。基守聞かせども。既くよき心付たる故に。先夜は最も精神を鎮め。神威を默念して。神劍を帶し。若し曖昧の言を發し。奇怪の容体あるあらば。直ちに取控ぎ吳んど。彼の問答の顛末。一々耳を傾け聞たりしかども。貴女もお聞の通り。廿七日の夜始て頼みに來て。廿八日に頼の通り勤行ひされば。即夜直に來て厚く禮を述て出行たる事ども。前後照應條不紊。片口の疑ふべきも。怪むべきも。無きに非せや。又かく申せば。過言の様なれども。狐狸如きの物。いかてか吾家に來りて妖怪を爲す

何事に經に限
る事其父の
爲と力を尽
せは、自ら
通る道、理
の爲と、其
を、集め、火
を、集めて、
其魂の、其
を受て、悦
なり云々、
經説など、
空を説て、
毒にも、藥
も成らざる
者なれば、
只其僧に、
ま、し、む
に、子、の
を、尽、す
と、答、へ
と、見、え
り、考、合
す、べ

し、重春考
ふる、重
事、の、靈
云、へ、ど
は、下、等
の、上、に
ある、に
既、に、神
昇、り、て
の、御、所
助、奉、る
神、靈、は
と、共、に
間、の、事
ら、ぬ、と
な、り、思
は、る、し

事を得んや。云ひて。此間に。狐狸の人に憑りて。種く口走り。形を化して。人を誑かしたるも。一週の
聞せたり。又いよ。孝七殿の靈を。信すべき証據なければと
云へど。亡靈よ何の証據あらんや。其言の前後。條理正しく。吾
父に前兆ありし等。是則ち証據なり。此証據をば証據としも
思はせ。外に証據をば云はる。は。貴女は。何の亡靈よりの品
物にてもあらばと思へるか。夫は大なる迷ひならん。に。狐狸の妖
怪を爲すに當り。何ぞ証據なき。望みければ。然らば。直ちに辻堂などの戸帳やうの物。頭髮の切たるもの。又
石地蔵の胸當なきをばつし來て。是れ証據なり。渡されて。大に驚き信じたる後。前記の品たる事現れたる談し
なごして。聞 此節の事に限り。些も可疑にあらざるを思へども。第一
貴女にして。少かも疑心ある内は。祭事を見合するは素より
の事に付。承知せり。よく。思ひ者へて見らるべしと云ひ
て歸したり。此後は亡靈。いかやきの頼みあるとも。こう女の
疑心晴ざる間は。決して依頼に應ずまじと思ひ定めたり。

斯て九月五日にも成ぬれば。母の病は次第に快くなりて。既
に病床をば離れて。常の處にて晚餐を食し。さて後皆々。椽先
に出で納涼し。母は。弟勇之助の。病床に行きて居たりしが。歸
り來て。また寒くなり。浦團を出してよと云。妻は。急ぎ
て一枚の浦團を着せしに。今一枚着せてよと云。又一枚着せ
たれども。益寒くなりたる容子にて。左ながら瘧に異ならせ。
されど人々は皆。此はまた例の來るに。さして驚く事
もなく。母を取纏て容子を。伺ひける。此時。こう女をも呼び
來りて。此問答を聞せたり。此の事。初夜の頃と云ひ。本宅にて
の事なれば。家内の者ども皆聞たり。其人は。父又三郎。基守。弟。宗。妻。ま。ま。
宗無二の信者なり。さて煩悶苦惱。前夜に異ならせ。暫くありて。母は。
あゝ熱いと云て。浦團をはね除て。うつ伏になりて。何か此間小聲に

よく聞取り
ざりき。

さて母云。まわれ待成れ。こんな處で熱くて堪りませぬ。さう
仰らるゝは誰方でござります。御姓名が分ませぬ。御姓名を
仰られませ。 此時枕元に。何物が居て。づぶく小聲にて呼び起すものありしか。目を閉て居たる
故。誰とも分ざりし故に。如斯云ひたりし。後に正氣に成たるまきに。語玉へり。されど
初め此を聞て。基守ら思ふやう。孝七の靈ならは。御姓名をさし申すまじきに。さては又他の亡
靈の來るにこそ思ひ。心を付て居たりしか。矢張孝七の靈なりしこと。下に云ふか如し。

靈云。湯屋孝七あり。先日は永々の苦痛も除あり。穢い處を
去て。結構な御社に參ること、成た。其嬉しさに打紛れて。
今一つれ頼み申べきことを申させて有ました故に。又參
りました。

母云。へ。夫なら此屋敷へは。いつれ出で成れましたか。
靈云。實は昨夜參りましたれど。時間か後れたに依て。此方
の屋敷内にれ世話に成ました。

重春云、幽
顯問答に、
靈の談と、
玉手次に説
れたるとに
因て、産土
神の御祭に
は、氏子の
靈魂も預り
て其を受る
と成るが、
穢しき靈は
遠く去り居
るよし云へ
るを考へ合
すへし。

母云。へ。昨夜は時間が切れましたか。さうして何處にれ居
で有ましたら。

靈云。もはや斯様に神と成ましたれば。何處も穢く宿るべ
き處がない故。此方の屋後の空社に御約介に参りました。
基守云。この時間云々の詞に就て考ふるに。亡靈の來るはいつも夜間のみにして。豈は其氣さしたになき事
なれば。日光ある内は亡靈より來ること叶はざる。幽規の有る事ならん。かゝる故を以て。昨夜靈の來るは
曉天頃にして。兎角する間に。日光のさし昇らんことを恐れて。斯く云へるに。但し。試に云ふのみぞ。
又空き社さば。吾屋後の庭内に小祠あり。本年の春まで。神祇を鎮祭たりしが。家の奥床を。神床に造り構へ
て遷座して。今は空社と
なれるを云へみなり。

母云。それは能うお氣が付れました。夫はようれ氣が付れま
した。夫なら起て承りましたよ。是迄は寢て居て。眠り半分に
承りました。と云ひつゝ起上りて。両手をつき。屹と上座を見
て。甚く驚きたる狀して云く。やわ貴方の其お姿は。夫はまわ。
どうで有ましたら。先日のお姿とは。打て異つゝ其れ姿をそ

れはまあ。どう云ふお奇麗なとで有ましよう。と云ひて深く感じ入て。眺めたりし。また云ふや。私共が此世を去つたならば。さう云ふお姿に成れましようか。

霊云。成れまはる。此方には日頃神様を大切に祭り成れて。朝夕にお祓が上りますれば。死すれば其儘神様の處にれ出て。直と此通りの姿になられます。私の様に永い苦しい目には逢ませぬ。

母云。夫は難有うござります。と云ひて。傍に向ひて。清水をと云ふ。妻。ま。立て。井水を汲て。茶碗に入れて。差出せば。取上て。右の指先にて。左右左と振そ、ぎて。残れる水を口に含み。口嗽して。座上に吹散し。拍手して。有難く。と云ひて。伏拜たり。

霊云。先日。のれ祓に依て。年来の罪科も除かり。社に参りたれば。尊き神様ありて。私を導きて。結構な處に鎮まるとを得させて下されて。斯る姿と成たに付ては。是非とも此現世にして。其導きの神様に。報賽のお祭をして。一の靈舎をも造り。位牌をも。神道に改先て。貰はねば成ませぬ。先日は舊來の本望達して。神の御社に参ることを得たれば。其嬉いれ禮のみを申して。此事を頼み。残たれば。又々御紹介ながら参りました。

母云。云々。此間の詞。何、口中にて。つばや。此時。亡靈の詞は。聞ねども。母の言を傍より聞に。又しも亡靈より。何、頼まる。様子なれば。前日。こ、う女の疑たる廉もあれば。決して。依頼に。應ま。しと思ひ。且は。こ、う女の

疑をも晴させんと。貌を正して。神劔を手握り。聲を勵して曰く。今人の肉眼には遮れど。雖ども正しく此の處に來りて。母の体を惱すものは何物ぞ。狐や狸か。但しは人の亡靈なるか。狐狸ならば速に正体を現すべし。亡靈あらば正しく姓名を名乗べし。貴重の人體ども憚らば。一度ならせ二度ならせ。今宵に於て既に三度と云もの來りて。苦惱煩悶せしむる條。不届至極なり。頼み度ことあらば。有やうに此基守に申べし。正當のことならば随分引受けて頼るべし。不義の依頼は決して應ぜると能はせ。若まゝ狐狸の所爲ならば。速に立去るべし。猶豫するに於ては神に祈り法を修して。一命をも取るべき。何にもせよ。先その姓名。または正体の何物たるを速に申べし。と迫りければ。

母はいく。左様ならば私が申ましよう。と云ひつゝ。基守の方に向て云く。湯谷孝七。後に聞けは。亡靈母に對して。吾名を名乗り。奥より頼みたる故に。如此云ひしなり。

基守云。是は孝七さんの亡靈とは案外なり。果して孝七さんの亡靈ならば。先夜お頼の通りに。早速れ祓を修したれば。其夜直ちに來りて。厚く禮詞を述て。再び來らざる由を確言して去るに非せや。然るを今夜また來るは何事ぞや。左様な曖昧などにては。決して孝七さんの靈とは覺せ。また孝七さんの靈に相違なくば。吾家にのみ來りてお頼と有ること甚以て不審千万。且迷惑至極の事なり。如何とならば。孝七さんには。許多の財産もあり。家もあり。屋敷もあり。跡相續の者も歴然たり。孝七さんの年忌吊ひたるや。右相續人の義務なり。本分なり。其義務本分を有せる相續

人には。何たる告もなく。知せもなくして。吾家にのみ来て
 ね頼みあるは。條理を錯乱したるものと謂べし。孝七さん
 は。生前に於て。決してさる條理を錯乱する人にては非ざ
 りしあり。尤も家もなく。財産もなく。謂ゆる無縁の亡靈に
 して。他に便べき方無して。吾家に来るは。據なき事とも云
 ふべけれど。孝七さんの靈ならば。右様の事あるべきに非
 ぞ。是れ疑べきの至なり。假令吾家には之を信じ。斯様のれ
 頼みありたりとて。相續人に告げ知せて。祭祀せんとする
 も。相續人之を疑ひ。之を信せ。これは狐狸なり。名もなき
 縁も無き亡靈なり。吾家には次々の靈祭怠ることなし。孝
 七殿の靈にして。何ぞ如此こと有らんやと云は。何を以
 て其疑を晴さんや。故に眞實孝七さんの靈にして。いよく

今の二事をお頼みあらんと思召さば。吾家には來らせど
 も。御自分の家に歸て。家内の者に告るなりとも。夢に悟ま
 なりともして。家内の者其心になりて。吾家に頼み來らば。
 何様とも頼みに應すべしと雖も。さは無くして。單に
 吾家にのみ來りて。何様にお頼みあるとも。決して引受る
 こととは出來申さ。又今承れば。昨夜の此の屋敷の内に。
 來ておさる様に聞受ました。此の屋敷内へは。御断で有
 ま。と云へ。亡靈。予には何の詞もなくして。母に對して。
 靈云。中々御立腹の様なれども。私は家に歸るとは出來ま
 せぬから。貴女からは非とも頼んで下され。
 母云。彼の様には申させぬ。さう云ふ譯で有ませれば。引受
 ぬとは申させぬ。夫は私が吃と申せし。と云ふを聞て。

基守もとまもまた云。何様なにかのね頼たのみかは知らねど。今申いままま通り。相續さうぞく人ひと。即すなはちおこう殿との。其心そのこころに成なて頼たのむ譯わけに成なませねば。幾度いくばくね頼たのまあるども引受ひきうけは致いたませぬ。

母云。あの様やうに申ましまさから。貴方あなたも。うの奇麗きれいをお姿すがたで。一度いちど家うちにね歸かえり成なれませ。左様さやうに成なれは。家うちの人ひとが。何程なにかか悦よろこぶておさりましとらう。

靈云。家うちに歸かえること。誰方たれが仰おほられても出來でませぬ。

母云。左様さやうならば。ね歸かえりがけよ。ね寺てらの和尚わしやうさん。夢ゆめを見みせでも成なれませぬか。如此云ふ故は。吾地方は。倭佛徒の巢窟にして。改葬すること甚難し。此度日の夜にも。寺の有るに。繰返して云ひ。今こゝにも如此云ひたるは。人の疑を防がん爲の。心配りなりしと覺たり。

靈云。寺てらの屋敷やしき内うちよは。尙更しやうま行ゆらうとは思おもませぬ。今晚こんばんは余程よほど御立腹ごたつぷくの様やうなれど。是非ぜひとも申ま勸すすめて頼たのんで下くだされ。

母云。左様さやうなことで有ありますれば。又私わたくしめらも申ま勸すすめて。必かならず勤つとまらざるで有あらましよう。

靈云。さつとね頼たのみ申まます。左様さやうならば。今晚こんばんはね暇いとがな申ます。時ときに今御社いまおやしろを出でますとき。前夜亡靈の一夜泊したる。屋後の空祠のこゝなりね扉びらを閉とちせ。開ひらけばなしにして出でましたから。後あとで餘人よじんの知しらぬ様やうに。貴女あなた行ゆきて。閉とめて置おけて下くだされ。基守もとまもさんが知しると。腹はらを立てましようから。必かならず忘わすれやうに。

母云。承知おぼえしました。左様さやうならばと云いひつゝ。頭かぶを上げあげて見送みおくる体ていをして。又打臥うちふしぬ。暫しばらくしは無言むげんなりしが。本性ほんしやうに復たして後あと云いふ様やう。今いまも來きて。くれゝの頼たのみなれば。どうでもね祭まつりりは爲して上げあげせあるまい。このこと故ゆゑに。いかになりし。悉ことごとく事ことの次第しだいと語かたり玉たまへと云いへば。

母云。最初寒くなりて後。少し仮眠みたりしに。何人か枕上に
 来りて。細き聲して。私語きつゝ。吾眠りを覺して。何の頼む様
 なるに付。御姓名をと尋ねたれば。湯谷孝七なり。頼み度事あ
 りて。昨夜うら来て居たと云ふ故に。驚きて眼を開て見れば。
 前日の姿とは雲泥の違ひにして。丈高く。顔はさながら玉の
 如く光り輝きて。目も當られぬばかりに美しく。頃には短き
 烏帽子を戴き。衣服は袖廣き白の装束なりき。其状甚も氣高
 く。有難さの餘りに。我々も此處を去て。幽界に参りたらば。左
 様な姿にならるゝやらんと問ひされば。此家には。日頃神様
 を大切に祀り成れて。朝夕お祝が上りますれば。死れば其
 儘この姿と成れまほ。私の様に。永い苦しい目には逢ませぬ。
 と云れたる言の嬉しさ尊とさ。云ん方なく。覺ゆる手を拍

て拜たりと云て。前記の通り。問答の始末を物語て。さて云へ
 るやう。先刻神靈の立れる期に。必ず忘ぬやうに。人の知らぬ
 内に。御社の扉を閉て呉れと云ふたに因て。提灯を點して行
 て。お扉を閉てくれと云へり。依て基守側より。いゝで然る事
 あるべきぞ。神靈は素より。狐狸だにも。其術を以て招くとき
 は。數百里を隔てたる處に住たるも。瞬時に來りて。まかも密
 閉し。さる室内に入り來り。また出行くに非せや。況て神靈と
 も有んものが。入るにもせよ。出るにもせよ。何ぞ扉の開閉に
 開せんや。よし開せるにもせよ。初先入るときは。閉たるを自
 ら開きて入たるあり。既に自ら開きて入たるは。此の神靈が。
 出るとき。また何ぞ之を閉せして出るの理あらんや。兎に角
 に。いかで然る事あらんや。と云へは。母は。否とよ其事の。必ま

忘ぬ様にと。念を押して往たこと故に。是非往て見と云ひ
 けれど。予は何ぞ然る事あらん。仮令有りたりとも。翌朝見
 れば分ることなりと云へば。餘の人々も之を聞て。神律の畏
 き。幽界の有状など。各冷汗を流して感じ入りたるも。闇夜の
 殊に屋後の庭樹繁りて物淋しき處と云ひ。現に今までも亡
 霊の來りて。種々物まどき事どもを。眼のあたり見聞したる
 折からと云ひ。何となく氣味悪くや思ひけん。誰一人。我れ往
 きて見んと云ふ者もなく。其夜は其まゝに濟しけり。
 さて翌六日の朝。弟峯司は。上毛郡八屋町なる。築城郡役所へ出
 勤せんと。早く床を起出て。奥室の戸を推開けさるに。此はい
 かに。庭前なる空祠の扉少し開きたるに。大に驚き。遽て。家
 内の者の臥所に來りて。昨夜亡霊の言に違はす。祠の扉開

きたりと告ぐ。彼れ人々驚き行きてこれを見るに。實に扉の
 少し開きたるなり。依て急ぎ。こら女をも呼寄せて之を示し
 たりき。

基守云。いま此扉の開きたる。又付て考ふるに。亡霊の去就
 決して扉の開閉に關するものに非ざるは。前説の通なり
 と雖ども。此節のこと。狐狸の所爲ならんか。既に人々之
 を疑ひ。こら女も前日。何の証據もなきにと云ひし一言あ
 るを以て。予。其夜亡霊に對し。餘人の疑は。何を以て晴さむ
 やと。詰問したるより。今如此云ふ事の浮妄ならざる証也
 と。云はせ語らせ。後之を自ら知らしめんと。亡霊の心配
 りにて。態と扉を開けさるまゝに出行き。又之を告げ置せ
 ては。人の之に心付ざる事もやあらんと。必も忘れぬやう

に閉てくれよと念をねして行きたるならんと思はれ
たり。

さて昨夜の靈験に依て。この女の疑團始めて氷解したりと
見えて。何卒亡靈の望みの通り。御祭祀を執行ひ呉よと願み
出たり。然れども。予は此時。主任たる教會所の事繁き上に。來
る十三日より。豊後鶴崎なる神宮豊後教會所の。秋季大祭
に。出張等の事ありて。寸暇なし。されど豊後より歸着後に
は。餘に遅延し。亡靈に對して。恐れあれば。是非共に豊後出張
前に爲て呉よと。この女達ての依頼に因て。本月十二日の午
後に。勤行まべしと約して。靈舎。靈牌。其他の神具は。中津魚町
なる細工職田中吉米に。誂へ。靈壇宅の奥床は。居村の大工職福永
作藏に造らせたり。

かくて十二日午後四時より。この女の宅に於て改祭式を執
行したり。其次第は。先新靈壇を裝飾す。次に清祓。次に神降。幽冥
大神
産土大神ニ。次に遷靈。佛式の靈牌より。次に献饌。神前靈前。次に祝詞。神前靈。次に
柱を鎮祭す。次に遷靈。神式の靈牌へ。次に献饌。各五靈。次に祝詞。神前靈。次に
修祓。大祓詞三度。略祓。詞四百四十四度。次に撤饌。次に閉扉等なりき。右齋主と祓主は
基守勤之。清祓。警蹕は。神宮教院六等輔教心得教導職試補緒
方又三郎。神饌。献撤は。緒方氏と。上毛郡垂水村外六ヶ村祠堂
にして。予か家の宗族なる湯谷道和尚なりき。是迄神靈をい。
佛の法号以て。通山慧達居士と申せしを。本日改めて。彌照躰
躰根老翁と證号して。新靈牌に認めたり。此日母は。初より此
祭場に参拜して有し。式の半過る頃より。少し寒くして。頭
痛の心地せり。とて。退去したり。さて祭典竟て後。靈前に皆打
寄り。一同は直會の神酒を班ち。晩餐を喫し。雑談などして。夜

八時頃に。予は緒方氏また弟峯司と同道して。家に歸りたり。折しも母は心地悪げに。廣間に獨り打臥たる。付側に就て呼び起したれども。眠りたる様なれば。さして心にも留めざりしに。緒方氏は留るをも聞かず。強て中津に歸るとて。家を出て一町計りも行きたらんと覺しき頃より。母はまたしも何の細聲して。語り始たり。そりや又例のなふんど。急ぎ又こら女並に亡靈の妹みつ女をも呼び來りて。共に皆之を聞したり。此時後藤の人。父文三郎。基守。弟峯司。妻まき女。村走丁の有吉治平。下男の長二郎。下女のゆか。並ひに亡靈の妹にして。上毛郡廣津村字和井田に嫁したるが。今日の靈祭に参拜し居たるみつ女也。こら女也。

靈云。先夜は御立腹ではあつたれど。あれ程お頼を申して置た故。今日かかど。御祭りを待て居たれど。一向爲て下されぬは。全くおこすの疑ひからのとなれば。御約

介なむら今晚は。今一度來て。おこすを此家に呼び寄て貰い。如何なれば。如此まで我が言ふ事を疑ふや。狐狸ならんとは。何ぞ其証據あるや。又誰某の云ふとなるや。屹と詰問せん存念なりしうども。今日既に望みの通り。御祭を爲て下されたからは。最早おおうの疑ひも霽たるとならん。依て其事は止め。爲可けれども。基守さんには。段々のお禮もあれば。餘の事は申さねども。是非ござる内よ。(基守。明後出立の答に付)一言の禮を申述べ。その上今晚は吾家にも歸つて。靈舎の摸様をも拜見し。其前におこすと。子供らと呼ば出して。屹と申聞せたい事があつて参りました。併し私に詞を交さぬから。貴女に何も取次を頼み申まきに因て。御苦勞なむら。一處に往て下され。先夜は基守さんも貴

女も口を揃へて。吾家に歸れと仰られたけれど。歸ること
は出来ませぬと申ました。其出来ぬと申した譯は。今晚
お談申ましよう。其は私の家は二人もつゝいて死人を昇
き出し。夫ざり一度の清祓も無いに依て。斯様の身となつ
ては。神位に昇りたる汚なく穢しくて。歸らざる様に有ませぬ。又
寺の境内は尙更のとあれば。誰方が仰られても。歸るとは
出来ぬと云ふたので有ます。然るに。今晚は御祓の驗に依
て。家内も清々しく成ましたれば。一度歸つて見たう存じ
まは。尊い御祓の驗に依て。私の年來の罪科も消滅て。神様
の所に參つて見れば。此世で謂ふ。地獄極樂を云ふ。所も
無ければ。路もなく。そんな沙汰をする者も有ませぬ。彼は
只。此世で仮に隔を立ただけのものにして。死行く所は誰

も皆一處と見えて。此世で見知た人も。段々往て居ました。
母様にも。此節ころお目に掛りました。が。母様の仰られる
には。其方が先に來て。己を待て居るであらうと思ふて來
て見れば。其方は居らぬ。いかしいたるならん。と思ひ煩ふ
て居たるに。今まで何處に迷ふて居たぞと。ひどい御異見
に逢ふて。誠に赤面致しました。

母云。左様でござりましたか。さうとは知らぬ。私も基守も強
て申たは。定めて御機嫌に障りましたらう。甚だ相濟ぬとで
有ました。恐入りました。御尤なこと。有ます。左様ならば御供
を致しませう。洩れ落ちたる事ども有らば。どうぞ一々に
れ差圖を。さいへさ亡靈の云へる詞は。餘人の耳には入らず。單に母のこの詞を。傍より聽たる處にて
は。今日の祭事の。神靈の意に適はざるありて。爲直し吳よきとならんと思ひはかりて
基守云。今こゝに來て母と問答も玉ふは。湯屋孝七殿の神靈

なりと思ふは否う。孝七殿の神靈ならば。今日の祭式は。神靈の冥覽し玉ふ通り。兼々御懇願の事なれば。十分注意して。早速執り行へんとは思ひしかど。仕奉る神宮教會所の事次々起りて寸暇之なく。遷延以て本日に至りしなり。祭事に加はりたるは。教會所詰緒方又三郎と。本村居住祠掌湯屋道和と二人なり。諸事基守の心には。十分注意したる心得なれど。神靈の御心には。定めて不満足に思召すこと許多あるべし。手淺學非才。能くする所に非ざるなり。請ふ親く教示し玉へ。再び改め祭るべしと云ひも竟ぬに。

母は予が方に振向きて手をつかへて。亡靈になり代りたるが如くして云く。どう致しまして。今日の御祭典。十分御丁寧にて勤め下され。何一つ不足と云ふとは更に御座りませぬ

と云ひて。甚氣の毒に思へる状に見受られたり。

基守云。今答へ玉ふは孝七殿の神靈と覺わたり。孝七殿の神靈にして。今日の祭式御意に適ひ。十分と思召す上は。速かに鎮るべき所に鎮り玉へ。後年の祭祀は今日の通り。都度よく怠りなく勤行せん。又貴家の諸事万事。散逸なき様。必お世話仕らん程に。御心置なく。神の冥府に歸りて。神掟を守り。永く久しく。眞の樂みを授かり玉へ。又分御靈をば。今日新に造設たる靈璽に留めて。永く貴家の靈舎に鎮まり玉ひて。家門の繁榮を守り玉へ。

靈云。承知しおした。只今歸り申さん。併し今晚は。吾家に一應歸りて。靈舎を拜見せんと思へり。いあいで有ましとうか。

基守云。それは誠に宜しう御座りませぬ。どうぞお歸り成れて。

御覽下され。

靈云。左様ならばお往で下され。

母云。私はもう往せども宜しくは有ませぬら。

靈云。私は歸りまして。詞は交しませぬら。貴女が往て。何も私に代つて云て下され。

母云。左様ならばお供を致しませぬら。さあれ立成れ。と云つゝ立て。腰を屈めて。廣間の出口を指さして。是よりお出なされと云ふ状して。自身は通常の上り口を下りて。戶外又出て。また腰を屈め。手真似して。さあれ先にと。道を譲りて。門を出て。前家なる。この女の家即ち神靈に行きたり。此時この女は提灯を携へて。母の先に立て。案内し。妻は母の身体を扶けて。後に附添ひ。父また基守みつ女は。其後より行き。此時亡靈は。

を譲りたるにつき。母の前に行きしと思へりしに。後母に聞けば。さてこの女の宅に至れ。は。母は屋外に立留り。腰を屈めて。座敷の上り口を指して。さあれ上り成れと云ひて。此時手は。直ちに座敷に通じて。靈舎の扉を開きて。前の物など取片付け。ければ。兩人も驚きて。自身は廣間の上り口より上りて。座敷の次の間より。靈舎に向ひ。手をつかへて。是は餘り火急な仕拵へで有ますれば。都合とい事も出来ませぬ。さつと夫れ位のこと。有りませぬが。お思召に叶ひませぬ。さうかと云へり。此時の問答を。次の居て聞たるは。湯屋道。奥村太郎右衛門。父文三郎。妻しよ。この女。かつ女。及び基守と男壽市(十一歳)。娘つ。外兄弟二人の兒女。並に本日祭事につき。加勢に來たる近隣の女子。下男下女等。あまた有たれども。一々其名を知らざれば。省きつ。

靈云。誠に結構に出来ました。是でこそ本望が達しました。さて先には。此所に壽市を始め。子供らも皆呼んで。云ひ聞せんと。思ふたれど。さうしては。以來怖れて。能くこの座敷

に來ぬ様になるかも知れぬに因て。れこ字ばありを呼んで。申し聞せましよう故に。爰に來て。私の云ふことを取次いで下され。

母は次の間より。もう是あらで宜しうござりましよう。

靈云。いや夫ではならぬ。爰に來て下され。さあ是非ともこへ。

此時母はつと立て。いかにするぞと。新靈舎の前に進み座して云。此方のれこうさんに。面會なされて。申まどがある。と仰せられま。と。操返して云へり。されどこう女は進み兼て居たりしか。と。人々勤めて靈舎の前に座せしめたり。

靈云。首尾よう今日の御祭を勤られて。何より以て嬉しい。此後はどうぞ疑ひなく。朝夕この前を拜禮して。子供らにも能く

申し聞せ成れ。何の疑ふとかある。其証據は。指さしてあの鏡（此鏡の列座の人。眼を靈舎に注ぎて。鏡やある。見れども。眼に中るものは無き。）あの鏡は眼には掛りませぬか。是れが何より能い証據。必も疑ひなきやうに。大切に齋祭るべし。また母様にも此節ころお目に掛りしむ。さついで御異見に逢て。甚以て赤面したる事なりしが。今日この御祭の事を。歸つてお咄し申したらば。何ばかりかた悦び成れるであらうと思ふ。どうぞ怠りなく敬禮あれよ。吾また此後は。此家を守るであらうに因て。

基守云。孝七殿の神靈に申ま。其儀は御心に掛け玉ふ。基守如斯であるからは。必す怠りなく。祭祀の事をば勤むべし。此家の跡の事も承知せり。其邊少しも心配し玉はせども。速うに幽冥神府に歸て。前にも申したる如く。本魂は神の掟の通

り。幽冥の神府に仕へ玉ひ。分御靈とば。此靈舎に留めて。永く此家を守り玉へ。

基守云。神靈の來る度毎に思ふやう。亡靈長く滞在あらば。必も母の身体羸弱て。病苦の重らんとを恐れて。少しにても早く歸り去らんとを欲して。常に其旨を以て亡靈に云ひ。勤しかど。後に成ては。此事も聞くべきを。彼事も問ふべきを。思ふ事多し。宮崎大門の顯幽問答抄に。皆吉富氏を中に置て。言次させしも。向の申す中に。又問ふべき旨を思ひ出さん爲なり。かゝるとは直談にて。誤るとあり云と。翁の云へりし言に思ひ當りて。甚遺憾なりき。此後の心得あるへき事に。思定めたり。

左様ならば出立仕らん。

母。左様ならばと云つゝ。立上り。手を振て。神靈の通る道を。列座の座敷の下り口より出て。手をつきて。私共が。又貴方の所に参りましたならば。どうぞ宜しう頼み申ませ。

靈云。それはお待申して居ます。ね早うれ出で成れませ。必老よきよお世話仕ります。基守按ふに。死後の心は。現世の人の心とは。別段なるも。死を悲み嘆く言にては無く。只其居所の定らざるを。憂ふるのみなりし。又。己に。吾母に對して。待ち申して居る。早く出でなされと云へる言など。決して現世の人が。人に對して。云ひ得る言に非ざるを以て。思ひ合すべ

母。左様あらばと云ひて。手を拍て伏拜せければ。列座の人々も。神靈を目には見ねども。正しく神靈の。今を限りと出行くなりと思ひしからに。皆母の爲し如く。手を拍て拜みけり。さて母は諸人に向ひ。只今お歸り成れましたと云ひて。其儘

こに打臥て。暫く眠しども。寤たりども。分らざると例の如し。
良あつて云く。隠居に行て。れ供の物一つ貰ふて來て呉と云。
隱居とは。手か家より。この女の宅を云ふ詞にて。今母は。その
隱居に在りなから。如此云へるは。其事を忘れたるにこそ。依て丸ばうる菓子を取て
出しければ。たゞ一ツ取て食たり。水は入らせやと云へは。水一
杯と云ふまゝに。清水を汲て出しければ。皆飲干て。又打臥て。
良暫くして氣分をつくるひ。手が家に歸りしむ。其後は絶て
何事も無りけり。

翌十三日朝。事のよしを悉しく聞に。昨夜も。最初は枕元にて。
細聲に呼び起さ故に。誰なるぞと云たれば。湯谷孝七なりと
名乗て。まうくなりしと。前記の通りの物語あり。さて姿は
いかいかりしと問ふに。去る五日の夜の姿と同じけれど。顔
は該夜より少し平面にして。さながら鏡の光り輝きたるが

如くなりし。前夜亡靈の。其証據はあの鏡に云ひた
るは。此故ならんと思ひ合されたり。衣服は先夜の通り。白装束
にて。廣き袖なりしが。隠居の座敷口を上る時も。靈舎の壇を
上るときも。其廣き袖を打振て上りたる状。いと勇ましく見
受られたりと。語玉へり。

基守云。右十二日夜の神靈の物語に依て。予が前八月廿九日に凡
そ人の體魂は。共に神の賜物なれば。死すれば體は元素に
歸り。魂は神の御許に歸るものなり。されば老母様の靈魂
も。必き神の御許に參り居る。相違無れども。孝七主の神
靈の。まだ老母様に逢せと云ふは。一人は神の御門内にあ
り。一人は其門外にあるが故なり。共に門内にあるを得ば。
相逢ふこと必せりと。云ひたる言の証ざるを悟るべし。之
に就て。彼佛教徒などの説く所にては。女人は五障三從と

て。男に勝りて罪深きものなれば。十方諸佛の力にも及ばざる所なるを。彌陀如來は。超世永劫の修行を経て。女人成佛の願を果げ玉へりと云ひ。さて其女人をして。成佛せしむる方も。女人のまゝにては。成佛せしむると能はねば。變成男子とて。女人を化して男子と成して。往生せしむる趣なれど。今この神靈の詞に依れば。此世にての老母は。矢張り後の世も老母にて。女人のまゝ恙なく。神の御許に参りたる由なれば。殊更に彌陀とやらんに頼みて。變成男子の煩わしき手数を願はせとも。宜しうらん者と思はれたる。されば神靈の云へる如く。地獄極樂は。此世にて。惡を去り善又遷らしむるの方便説にして。實有のものに非ざれば。仮令この世にて。佛にまれ。耶蘇にまれ。信ざる教は異なる。

と雖も。其は人間の私事。今生限りの沙汰こそあれ。死まれば即ち吾人どもに。神の御許に復歸するに。疑ひなきとになん。あはれ此一書。大に神魂歸着の幽理を發揮するに足れり。見む人。反覆玩味して。了解する所われ。かく筆記するはしに。腰折一首を得たり。左に
 人みなの頼むをしへいかとるとも
 まかれはおなし神垣のうち

明治十六年九月下濤

明治廿八年九月廿日印刷
同 年 十月五日發行

豐前國下毛郡中津町字二ノ丁第千三百拾番地

湯 谷 基 守

著 者

湯 谷

基 守

發行所 同國同郡同町同字第千三百九番地

發行所 神宮教豐前教會所

同國上毛郡八屋町大字八屋第千四百六拾貳番地

印刷者 吉 松 儀 太 郎

湯谷基守著

一 神 道 大 意

此書ハ天地造化ノ神理ヨリ社界諸職開始ノ祖神ヲ羅列シテ世人ハ造次モ神道ノ離ルヘカラサル大意ヲ平和簡易ニ記述シタル書也

全壹冊

湯谷基守著 眞宗開基源由書校註

此書ハ眞宗開基ノ初宗祖ノ願書ニ就テ儀奏役中山中納言ヨリ質問セラレタルヲ宗祖ガ返答シタル問答書ノ校註ナリ

並附錄

一 大 祭 祝 日 由 來

此書ハ文部省ヨリ諸學校祭祝日ノ儀式ヲ達セラレタル訓令ニ基キテ宮中御祭典ノ御式ヨリ臣民一般ノ敬肅拜賀スヘキ日本帝國ノ大祭祝日ノ由來ヲ詳記シタル書ナリ

全壹冊

一 出 定 笑 語 和 解

佛道ハ奧旨玄妙幽微ニシテ容易ニ探知スヘカラサルモノ、如ク云フ者アレド虛心平氣ニ此書ヲ一讀セバ直チニ其眞面目ヲ了解ス

上中下

一 靈 談 記 實

此書ハ豐前國下毛郡湯谷村湯谷孝七ノ靈歿後百餘日則明治十六年八月下旬ノ頃湯谷基守ノ實母トキ女ニ前後五ケ度依憑リテ種々物語リアリタルヲ和メ祭リテ神ト齋ヒ鎮メタル間ニ幽冥ノ狀況ヲ悉問シテ靈魂歸着ノ眞理ヲ明述シタル書ナリ

全壹冊

一 大 聖 日 蓮 深 秘 錄

此書ハ日蓮宗祖一代ノ事實ヲ日朗日與等六人ノ高弟ガ延嶺廟堂下ニ於テ末代ノ爲ニ記録シタルモノニシテ同宗ノ大秘錄也

全壹冊

